

令和 5 年 5 月 1 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12928

研究課題名（和文）障害者の子を持つ困難に影響を与えるローカルノレッジとしての医学的観点の解明

研究課題名（英文）Medical perspective as local knowledge affecting the difficulty of family formation for disabled people

研究代表者

竹田 恵子（Takeda, Keiko）

大阪大学・大学院人間科学研究科・招へい研究員

研究者番号：70707314

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：医学系論文の分析、医療者および障害者を対象としたインタビュー調査、障害者を対象とした質問紙調査によって、一般に流布されたローカルな医学的観点による「障害」が、障害者の周囲との軋轢を生み、障害者の家族形成を妨げる一因になっている可能性が示された。ゆえに、障害者は周囲の一般人よりも専門家の子育て支援を望む傾向にあることもわかった。ただし、「子を持たない」と考える障害者は、ローカルな医学的観点も含めた発展的な観点を育み、独自の家族形成に役立っていたものの、家族形成を達成するには就業や生活支援の充実といった社会的な課題の克服が先決であるとしていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般に流布されたローカルな医学的観点による「障害」が、障害者の周囲との軋轢を生み、障害者の家族形成を妨げる一因となっている可能性が示された。しかし、この医学的観点は多くの場合、医療者独自の医学的観点とは異なり、「障害」に対する周囲の偏見や無知から生じたものであることが示唆された。社会一般に広がるこのようなローカルな医学的観点の存在を知ること、障害者が自らの家族形成を遂行するための第一歩を踏み出せるのではないかと考えられる。ただし、「子を持たない」と考える障害者の意識は、周囲の偏見や無知から生じた医学的観点による「障害」で全てが説明されるわけではなく、近年の非婚化の影響も大きい。

研究成果の概要（英文）：Analysis of medical articles, interviews with medical professionals and people with disabilities, and questionnaire survey of people with disabilities indicated that the commonly disseminated medical perspective of disability may be a factor in preventing people with disabilities from forming families. However, not all of the attitudes toward family formation of disabled persons who would like to be "childfree" were explained by these obstacles from a medical perspective. The attitudes toward family formation of people with disabilities who would like to be "childfree" have been greatly influenced by recent Japanese society, which has increased non-marriage and avoided child rearing.

研究分野：社会学

キーワード：障害 家族形成 医学的観点 ローカルノレッジ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 障害者の家族形成への逆風: 「障害者差別解消法」の施行を始め、障害者の自立を支援する動きは本格化しようとしていたが、障害者が自分の家庭を持ち、子を育てることには否定的な見方をされる場合があった。

(2) 非婚化と少子化: 日本は 1970 年代に婚姻率のピークを迎えたものの、その後は減少が続き、2013 年には過去最低の婚姻率を記録し、1970 年代前半の半分の水準になった。また、婚姻に関する若者の意識も自由度が高まり、結婚に肯定的な割合は低下し続けていた。

### 2. 研究の目的

障害を個人の問題として扱うのではなく、障害は社会的につくり出されたという考え方が近年に広まってきた。しかし、障害者が社会化するなかで内面化する「健常が幸せ」とする医学的観点の影響力は大きい。これは障害者が自分の家族を持つ際に直面する問題でも同様である。その一方で、結婚・妊娠・出産・育児という家族形成の流れの中で障害者が遭遇する医学的観点は中立的な科学性に立脚しているようでいて、実は多数者の価値観と結託し、障害者排除の一翼を担うと指摘されている。しかし、動的かつ文化的側面にも注目したローカルノレッジとしての医学的観点が、障害と家族形成にどのような影響を与えているかは明らかにされていない。産科・周産期医療に留まらず生殖医療もめざましく発展するなかで、空白とも言えるローカルノレッジとしての医学的観点と、その障害者への影響を解明することを本研究の目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) 医学的観点の解明: 障害を扱う論文等の医学関係資料を用いて計量テキスト分析を行い、医学的観点の特徴を解明する。また、産科や小児科等に携わる医療者から障害者の妊娠と出産に関する経験や意見を聞き取り、医療者独自のローカルな医学的観点を仮説生成的に浮かび上げらせる。

(2) 障害者への影響の解明: 障害者を対象に誕生から現在までの障害との付き合い、定住家族との関わり、生殖家族の形成に関する希望と障壁等を聞き取り、障害者の家族形成へ影響を与えている障害者独自のローカルな医学的観点を仮説生成的に浮かび上げらせる。その結果を踏まえ、質問紙調査にて、障害者の家族形成に影響を与える社会的要因と障害者独自のローカルな医学的観点の関係を検討する。

### 4. 研究成果

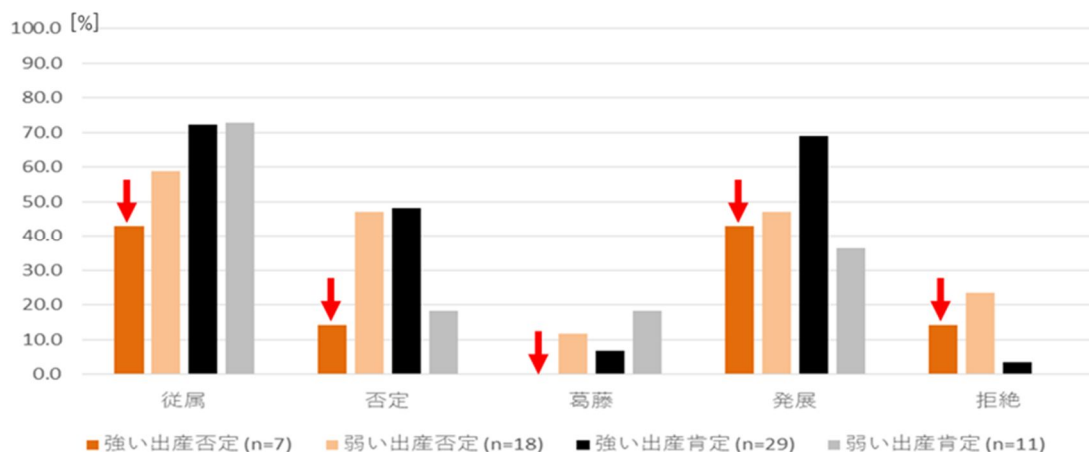
(1) 日本語の医学関係資料を計量テキスト分析したところ、資料の「背景」部分では 11 の主題(障害者福祉の歴史の変遷・支援効果の検討・妊娠の心理的衝撃・家族形成の困難の克服・周産期に生じる医学的課題・在宅療養・家族のケアと支援・保育事業・児童虐待・長期的な健康障害の影響・ストレスの研究)、「考察」部分では 9 つの主題(脊髄損傷者の家族形成・当事者の自律性の尊重・保育支援体制の整備・家族形成と人生の意味・障害者の家族形成に関連する要因・障害の受容過程・気持ちにより添う・在宅療養制度の問題・教育機関との連携)が抽出された。これらの視点には、障害を克服した健全な家族形成を理想とするが、十分な支援が実現できないことへ苦悩し、自らを障害者と重ねて共に歩もうとする面があった。

(2) 医療者を対象としたインタビュー調査にて、障害と家族形成に関する医療者の視点を分析したところ、家族形成に取り組む障害者の姿(車椅子の障害者の家族形成、精神障害を持つ妊婦のリスク)、社会と障害(障害者が社会で直面する困難、障害を排除する社会、障害者への社会的支援)、医療と障害(障害者の希望尊重、医療の進歩に伴う問題、医療者という職業、障害とは何か)、家族と障害(親になるということ、障害児の母親)という主題が抽出された。これらは、障害者の家族形成を医学的なリスクからとらえる視点があるとともに、社会制度の支援不足や現行の医療技術・医療制度の問題、さらには職業倫理や家族形成の核となる親の役割にも問題意識が及ぶユニークな観点であった。しかし、その観点は現行の医療制度や医療者の職業倫理等によって、当事者である障害者へ伝えられないという面があることもわかった。

(3) 障害者を対象としたインタビュー調査にて、障害者の家族形成に関わる要因を分析した

ところ、障害者の家族形成では 自立 が最初に直面する課題であり、これをなしとげるためには 道具 を用い、パートナーシップ を育みながら課題を 克服 する必要があると考えられていることがわかった。自立 を果たした障害者は、家族形成への 意志 を確立し、目的を果たすために 道具 や パートナーシップ をさらに充実させて、育児環境の整備 も積極的に進めていた。また、障害者の家族形成を支えるためには、社会が 支援の拡充 と障害にまつわる 教育の推進 を実現させ、多様なパートナーシップ を受け容れることも必要だと考えられていた。これらのなかで、障害者の家族形成に関する医学的観点が明確にあらわれたのは、妊娠・出産に必要な 道具 にまつわる話や、先天的な障害を持つ者が自分の子へ障害が遺伝するかどうかを案じたり、親から受けた虐待を自分の子どもに振るうのではないかと恐れたりするときであった。障害者の話に表れるこのようなローカルな医学的観点は多くの場合、伝聞による曖昧さがあるが、自身や知人の障害者の体験と混ざり合い、本人の家族形成を方向付ける材料の一つになっていた。また、20、30 歳代の協力者には、家族形成そのものに関心が薄い者が存在することもわかった。

(4) 障害者を対象としたインタビュー調査にて、「子を持つかどうか」に関する協力者の態度と医学的観点の関係を分析したところ、「子を持つつもりはない(強い出産否定)」とする者は、そうでない者よりも家族形成に関する医学的観点への反応(従属・否定・葛藤・発展・拒絶)の出現率が低めだった(下図参照)。これは、「子を持たない」と考える障害者にとって家族形成は医学的な問題ではなく、社会的な問題(たとえば、経済的課題、パートナーとの出会いの場がない、育児支援不足など)であることを示唆すると考えられる。



(5) 障害者の家族形成に影響を与える要因と医学的観点について質問紙調査を実施したところ、「あなたは、あなたの障害が結婚の妨げになると思いますか」という質問へ「ある」と回答した者は 153 名 (68.0%)、「ない」と回答した者は 56 名 (24.9%) だった。また、医学的な情報を参考にして子を持つかどうか考えたことがある者は 79 名 (35.1%)、子どもを持つことによって自分の健康が悪化するのではないかと怖れたことのある者は 43 名 (19.1%)、自分の障害が遺伝するのではないかと怖れたことのある者は 113 名 (50.2%) だったことから、子を持つかどうかの決め手として、医学的な情報は一定の影響力を持っていることがうかがえた。ただし、正確かどうか疑わしいローカルな医学的情報をもとに「子どもを持たない方がよい」と言われたことのある者は 36 名 (16.0%) だったことから、障害を理由に家族形成を妨げられるという外部からのあからさまな差別的圧力は、徐々に影を潜めつつあることが示唆された。

「いずれ子どもを持ちたい」は 40 名 (17.8%)、「子どもを持つつもりはない」は 51 名 (22.7%)、「まだわからない」は 20 名 (8.9%)、「すでに子どもがいる」は 111 名 (49.3%) だった。分析の結果、「子どもを持つつもりはない」と答えた人には、生まれつきの障害を持つ割合が高く、障害年金を受給している割合も高いということがわかった。また、このような人たちには、医学的情報を参考に子を持つかどうか考え、子を持つことで自分の健康が悪化すると懸念し、疑わしい医学的情報をもとに誰かに「あなたは子どもを持たない方がよい」と言われた経験を持つ割合も高かった。つまり、「子どもを持つつもりはない」と答えた人には、実際に家族形成へ取りかかる前に、周囲からの軋轢や差別的言動が向けられることによって、必要以上に自らの障害の悪化や妊娠・出産・育児への懸念を多く持たされてしまうのではないかと推測された。その一方で「すでに子どもがいる」と答えた人は、自分の障害が結婚の妨げになると考える割合が他の人たちより低く、育児協力を周囲の人たちに期待する割合も他の人たちに比べて全般的に低い傾向にあった。しかし、これらの人では「障害者福祉が実情に合うようになれば、子どもを持つ障害者が増えると思う」という割合が、他の人たちよりも高く、社会的な支援が手

厚ければ手厚いほど、障害者の家族形成は進むだろうと考えられていることがわかった。さらに、障害者の育児支援に期待されるアクターとして家族・友人・近隣住民・職場の人・医療従事者・教育関係者・福祉支援者・福祉行政に携わる地域窓口の担当者・近くに偶然居合わせた人、インターネットを介して知り合った人をあげたところ、家族が最も期待されていたが、その次に期待されていたのは友人・近隣住民・職場の人ではなく、医療従事者・教育関係者・福祉支援者・福祉行政に携わる地域窓口の担当者といった専門家だったことから、障害者の育児支援には専門家をうまく動かせるような体制をつくり出すことが必要だと考えられる。

(6) 以上の結果より、一般に流布されたローカルな医学的な観点による「障害」が、障害者の周囲との軋轢を生み、障害者の家族形成を妨げる一因となっている可能性が示された。しかし、この医学的観点は多くの場合、医療者独自の医学的観点とは異なり、「障害」に対する周囲の偏見や無知から生じたものであることが示唆された。社会一般に広がるこのようなローカルな医学的観点の存在を知ること、障害者が自らの家族形成を遂行するための第一歩を踏み出せるのではないかと考えられる。ただし、「子を持たない」と考える障害者の家族形成に関する意識は、周囲の偏見や無知から生じた医学的観点による「障害」で、すべてが説明されるわけではなく、近年の世相(その代表としてあげられる非婚化の影響)も大きい。ゆえに、障害者の家族形成に関する問題は、「障害」をめぐる諸問題と非婚化を促し子育てを忌避させる近年の日本社会のあり方からもさらに検討を深めていく必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 竹田恵子	4. 巻 41
2. 論文標題 障害と家族形成に関する医学的観点の特徴 計量テキスト分析を用いた保健医療関連論文の解析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報人間科学	6. 最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/75372	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹田恵子
2. 発表標題 障害者の結婚・妊娠・育児に影響を与える要因 インタビュー調査による仮説生成の試み
3. 学会等名 日本子育て学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹田恵子
2. 発表標題 障害者の家族形成に関するローカルな医学的観点の揺らぎ
3. 学会等名 障害学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹田恵子
2. 発表標題 障害と生殖に関する医学的観点の特徴 計量テキスト分析を用いた保健医療関連論文の解析
3. 学会等名 日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田恵子
2. 発表標題 障害と生殖に関する医学的観点の解明 保健医療関連論文の計量テキスト分析を使って
3. 学会等名 障害学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田恵子
2. 発表標題 「障害」をもつ人たちの子育てをめぐる意識 当事者を対象としたアンケート調査からの一考察
3. 学会等名 日本子育て学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>障害と妊娠・出産・育児 障害者の子を持つ困難に影響を与えるローカルノレッジとしての医学的観点（「大阪大学学術情報庫」収載）  <a href="https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/90048/">https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/90048/</a></p>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------